

「 Stanford 大学海外研修報告書 」

福井大学医学部附属病院
石田 智一

1) 期待していた事とその結果

Stanford 大学における臨床的な放射線検査と研究の実際について海外研修にて学び、本施設に応用することを目的として参加した。今回の研修プログラムは講義と実機を用いた実習という形式がとられ、非常に充実した内容であった。全体的に講義内容は Cardiac imaging, Neuro imaging, Functional imaging, molecular imaging といった最新のトピックスが多く、Stanford 大学で行なわれている最新の研究についても含まれていた。Stanford 大学病院の見学は、CT, MRI, 治療, 3D image lab であった。検査は日本で行われているものとほぼ同様と思われたが、様々な検査データが PACS に集積されており3次元画像やfusion画像の作成は病院とは全く別の研究施設にある3D image lab にて行われていた。日本では検査を担当した診療放射線技師により画像処理作業を行なっているがStanfordでは一日中、画像処理を行なう業務として確立されていた。具体的な処理方法は、各検査目的、部位によりプロトコル化されており基本的にそれにそって行なわれていた。また検査データの条件(特に造影タイミング、血中造影剤濃度など)の違いによっては、処理方法の最適化をして画像処理業務が行なわれていた。このように日本での現状とかなり違いが生じており本施設の検査に応用することができると考えられた。また3D image labのように処理専門という部署をつくることは困難であるが、より専門性をもたせて質の高い情報を提供する必要があると感じた。研究的には、講義で最新の話を聞くことができ、講師の先生方とコンタクトを取りながらデータや研究ができるように繋がりを生かしていきたい。

2) 最も印象に残った事

この研修において最も印象に残った事は、講義内容も多くあるが、講義、実習ともにスケジュール通りの時間で行なわれたことである。講義は講師が英語にて発表した後、通訳による日本語への翻訳が行なわれる逐次通訳であった。全ての講師においてそれを含めてほぼ時間通りに発表が終わり、ディスカッションが行なわれたことに非常に感心した。それについて話を聞いてみると、アメリカだけでなく欧米では授業や発表の時間を厳守することはその人の能力と評価され、いくら優秀であってもその後の仕事に影響するということであった。仕事においてもスケジュール通りに行なわれなければ評価は下がり、またその人の上司達の管理能力まで評価されることになる。さらに自分の意見を決められた時間内に述べる能力は幼稚園から求められ、みんなの前で自分の好きなものを述べることから始まり、小学校ではスライドを用いた発表とディスカッションの授業があるそうである。これが欧米人のスピーチ力の源だと実感した。こういった能力は学会発表や座長を行なう上で非常に重要であり学ばなければならない能力である。

2) 今後の海外研修に期待する事

今後の研修では、CT, MRI, PET 以外の分野についての内容が望ましいと感じた。また病院で働いている放射線技師の方ともっと交流する時間を取り、検査の実際だけでなくアメリカにおける放射線技師の立場、役割、制度のようなアメリカ事業を紹介する内容があると良いと思う。



CT 検査の造影方法に関するスペシャリスト
(Dr Fleischmann)と共に